

令和4年3月

◆池田亮二 選 ～絵手紙で振り返る令和三年～

七、会いたくて会いたくなくて

友来る嬉しうとまし社会距離



人に逢えば三メートル離れて挨拶する。親しい間柄の時は拳を突き出して合わせる。マスクしたままなので、相手が笑っているのか顔をしかめているのか分かりません。ベンチに腰掛けようとするとき「社会的距離を保ちましょう」とあり、二人の仲に割り込むように×印のシールが貼ってあります。おまけに「大声で話してはいけません」とまであります。

「世の中に人の来るこそうれしけれ」とは云うもののお前ではなし。来客の多かった内田百閒が、玄関に貼紙をした狂歌ですが、元歌は大田南畝で、「うれしけれ」は「うるさけれ」でした。人間の感情は複雑で屈折しているので、私にはどっちも似たような心情に思えますが。

母親が息子に言うなら「帰省するな」とはっきり言えるでしょうが、友人や恋人に来るなどと言われると、コロナの感染防止のためなのか、それとも嫌われているからなのかと心が千々に乱れるでしょう。

永き日や欠伸うつして別れゆく 漱石

昔はのどかでした。今は欠伸がウイルスの感染になりかねないのです。

八、君の名は？

ITに万事お任せで一億総昼寝



窓口で「拙者、近藤勇でござる」と言っても、「？」と通じません。「マイナンバー〇〇〇でござる」と言えば、「ああ、新選組のコンドウさんね。池田屋に乱入なさった方ですね」とすぐに分かってもらえ、死亡保険にも加入できます。デジタル庁とは、「医療、教育、防災等の国民に関わるデータに連携することで国民のニーズに応じたサービスを提供する」ことを目的としています。迅速な対応のために、人は一つの番号で登録され記号化されるのです。記号化された人間に対して政府は親切です。スマホを鳴らして、「今日は元気がないですね。しっかり体操しましょう」とか、「食事は栄養たっぷりの〇〇社のハンバーグを…」とか教えてくれるのです。いつもどこかであなたを観察しているのです。

反面、銭湯で隣の爺さんにアベさんの悪口を迂闊に喋ったりすると、たちまち「ナンバー〇〇〇は、反体制のくせ者である」と登録されてしまうかも知れません。そして、私のように未だにマイナンバーカードもスマホも持たない人間は、次第にこの世に存在しない員数外の扱いとなり、幽霊のように見なされるかも知れません。

九、偶像と実像

無菌培養のきみしあわせか長い夏



片田舎に住んでいた頃は、俳優やスポーツ選手などの有名人に接するのは、もっぱらラジオ、映画、雑誌などの媒体によってであり、彼らは近寄り難い雲の上の偶像でした。それが、東京に出てスターや著名人に直に接した時は、感動を覚える一方で媒体から得たイメージとのズレを感じることもありました。大学では、謹厳な格調高い論文を書く教授にも、反面、飲兵衛で助平の顔もあることを知りました。私のような怠け者は、そのもう一つの人格にひかれて大学に通ったようなものです。

今の学生達が、オンラインの画面に映る余所行き姿だけに接して生身の人間に触れられないのは、世の荒波を越えるための免疫性を持たなくなるのではないかと、少しだけ余計な心配もするのです。